

的協力を得たことの意味は大きいものというべきだろう。それにジンメル論文は社会の形態がいかにされるかという題になっているが、ジンメルの唱えた形式社会学がいかなるものであったかを教えてくれる内容の豊かなもので、後のフォン・ウイーゼの形式分類に見られる社会関係のたんなるカタログに墮したものと大きいへだたりを感じさせるものをもっている。デュルケームはこの第一巻刊行と同じ年ぐらにかいた「社会学の学問的領域」と題する論文をかいている。これはジンメルの形式社会学宣言に対する回答としてかかれたものである。筆者はこの論文ははじめイタリアの社会学雑誌に発表されたのであるが、後著作集に収録されたものを訳出し、拙訳「モンテスキューとルソー」の附Ⅱ社会学論の第3番目に社会学とその学問的一領域として収めたのであるが、学史関係を専攻される方々の参考資料として利用下さるようおすすめしたい。またラッツェルの論文は人文地理学の立場からのものであるが、デュルケームの社会学講義 *Leçons de Sociologie*<sup>28)</sup> に展開されるデュルケームの国家論と関係して見ると面白い。デュルケームはボルドー大学に就職する前にドイツにおける道德の実証的研究の現状を報告して学界および文部省首脳者たちの注目をあつめたのであるが、ドイツの社会科学の成果には敬意を表していたので、その社会形態学 *Morphologie sociale* の構想の参考資料として、ラッツェルの論文を掲載したものであろう。スタインメッツの論文もデュルケームの方法論に出てくる種 (*espèces sociaux*) との関連でよまるとその意味がよく理解されるものである。しかしいづれにしても、社会学がその誕生の初期においてこうした国際的交流が試みれたことの意義は忘れられてはならないものである。こうした研究上の業績に加えて、年報が社会科学の学界に対する隣接諸科学にわたる広大な領域の文献に対する批判的分析の提供のもつ意義もまたそれに匹敵するとも劣るものではないものをもっている。社会学年報の第一輯だけで Ph. Besnard のま

めたところによると何千という数にのぼっている。社会学年報チームと彼の論文によると<sup>29)</sup>、文献の分析を Full Review と Short Reviews、Notices および Introductions に分けられている。Full Reviews は1,762、Short Reviews 1,162、Notices 1,553、Introduction 72 で合計すると4,504となる。ただ以上の単なる算術合計では意味がない。それで Full Reviews を中心としその他をこの1/3の比重をもつものと推計して見ると約年2600~2700になるのであるが、このうちデュルケームとモースの占める比率は大き Full Reviews で Durkheim は282、モース270で全体 (Full Reviews) の1/3近くを占めているのである。一年の平均数をとると24と20になる。他の業務をもたない人にとっても年間20の文献を読んで分析することさえ容易な業ではないことが知られるのである。さらし編集上の事務を考えて見るだけでもおびただしい量に上るのである。経済分析の歴史を刊行した Schumpeter はおそらく経済学者ではもっとも読書した人であろうといわれるが、デュルケームの著作の数からみても、年報への貢献を考えると、Schumpeter に劣ることはないものと推定できよう。デュルケームが寿命を縮めたのはこうした寝食を忘れた努力のためではなかったかと考えざるを得ない。学者としてのデュルケームの偉大さが偲ばれるのである。しかもこれはデュルケームが記録樹立を目ざしたことの結果によってもたらされたのではなく、ひたすら学問への貢献という精進の努力の賜ものなのである。カラディ V. Karady は社会科学の発達はその政府のイデオロギー的態度によるところが大きいという<sup>30)</sup>。デュルケームの社会学が大学の学科として生存権を獲得したのはフランスの第三共和制がフランスの政治が王政復古へ逆転することのないよう国民に民主的な考え方を定着させることを目的として第三共和制の当局者が共和国体制が国民の強い支持を得るように教育の改革を定着させるための政策を実現するためであった。これは周知の事実であり、第三共和制成立当時のパリ大

28) 社会学講義、宮島喬、川喜多喬訳がある。

29) Philippe Besnard, *The Année Sociologique* team in Phil. Besnard, *The Sociological Domain* p. 32. Tabl J.

30) V. Karady; *The Durkheimiens* in Academe (in Phi. Besnard *The Sociological Domain*) chap. 2. p. 71-89.